彦根市総合教育会議　会議録要旨

平成 30 年度第 2 回彦根市総合教育会議	
日　時	平成 30 年 11 月 1 日（木）　午後 2 時 30 分～午後 4 時 15 分
場　所	彦根市民会館　第 1 会議室
出　席	彦根市長　大久保　貴 教育長　善住　喜太郎 教育長職務代理者　小松　照明 委　員　本田　啓子 委　員　永濵　隆 委　員　西川　孝子
欠　席	なし
議事次第 1　議題 (1) 全国学力・学習状況調査の結果を受けて 2　その他	

○企画振興部長　大変お待たせいたしました。それでは、ただいまから平成３０年度第２回彦根市総合教育会議を開催いたしたいと思います。

それでは早速ではございますが、次第に沿いまして進めてまいります。

（１）「全国学力・学習状況調査の結果を受けて」につきまして、資料の確認と合わせまして、学校教育課より説明をお願いいたしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○学校教育課主幹　失礼します。お手元に「全国学力学習状況調査から見る彦根市の子ども」という資料を配布しておりますのでご覧ください。また、パワーポイントでも資料を提示させていただきますので、どちらかをご覧いただきながら説明をお聞きいただければと思います。

まず、「全国学力学習状況調査」とは何かと言いますと、新学習指導要領に示された理念を具現化した評価問題です。今、求められる学力は、この調査問題に具現化されていること、こうした問題を解ける力を培う授業への改善が求められていると理解しております。

本日、今年度の学力学習状況調査の結果から見える、彦根市の子どもたちの学力と学習状況について説明させていただきます。

まず、本年度の彦根市の調査結果の概要でございます。

今年度は、全ての科目で全国平均を下回りました。赤字の科目は、平均正答率が全国平

均より２％以上低いところで、課題が大きいと見ています。

続きまして、教科ごとの児童・生徒の回答状況をグラフ化したものでございます。正答数ごとに児童・生徒の割合を示しています。

棒グラフは、彦根市の児童・生徒の割合。ひし形の実線の折れ線グラフが、全国の児童・生徒の割合を表しております。

小学校算数です。先ほど、課題が大きいと申しましたＢ問題のグラフを見ますと、赤丸のところでございますが、正答数が多い児童の割合が全国より少ないことがわかります。

青丸でございますが、逆に正答数が少ない児童の割合は、全国より多いとわかります。

続いて、５ページでございます。小学校理科です。全国のグラフ、県のグラフとおよそ同じでございます。

続いて、６ページでございますが、中学校の国語です。こちらも、初めに課題が大きいと申しましたが、Ａ問題、Ｂ問題ともに、やはり、正答数が多い生徒の割合が全国より少ない状況でございます。逆に、Ｂ問題では、正答数の少ない生徒の割合が全国より多くなっております。

続きまして、７ページでございます。中学校の数学です。課題の大きいＢ問題では、やはり、赤丸、青丸、先ほどの小学校算数Ｂ、中学校国語と同じ傾向があると言えます。

続きまして、８ページでございます。中学校理科です。中盤の生徒の割合が少ない実情でございます。

続いて、９ページでございます。教科の正答率を領域ごとに見ていきます。

左の赤が彦根市、右の青が全国のグラフです。真ん中の黄色が、滋賀県でございます。

赤の枠囲みのところでございますが、国語科では、小中ともに全国的に書くことの正答率が他の領域より低いことがわかります。国語科で自分の考えをまとめて書くことは、本市の子どもたちの課題でもあります。

また、本市の平均は、話すこと・聞くこと・読むこと、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項領域で、全国平均を下回っております。

続きまして、１０ページです。

小学校算数では、数量関係領域が他の領域より正答率が低目でございます。

中学校数学では、算数、資料の活用の領域が他の領域より正答率が低めです。また、ここでも、本市の平均は、どの領域も全国平均を下回っております。

理科でございます。１１ページです。

全国的に小中とも、生物的領域の正答率が高く、地球・地学的領域の正答率が低めでございました。

小学校では、本市の平均は、どの領域も全国平均を下回っております。

中学校では、物理的領域以外の３つの領域で、全国と同等の正答率でございました。

１２ページに移らせていただきます。

彦根っ子の学習の課題ということで、各教科、課題はこのように捉えております。

１３ページに移ります。

彦根っ子の学習の課題の総括でございます。

課題としまして、まず１つ目。赤文字で示させていただきましたけれども、自主学習を習慣化することが大切である。

２つ目。互いの考えを伝え合い、ともに学び合う時間を充実させること。

３つ目。思考力や表現力の向上とともに、文章の後半でございますが、自分の考えを的確に表現する。これらの課題があると総括させていただきました。

それでは、１４ページに移ります。

彦根市の平均正答率と全国との差について。平成２５年からの推移を示しました。

小学校では、最も厳しい結果だった平成２７年度から、徐々に全国との差が小さくなってきています。

中学校では、課題の大きかった国語科で、全国との差が小さくなっています。いずれも、これまでの取り組みの成果と思います。

子どもたちの確かな学力を身につけるためには、今まで各校でそれぞれの先生方が工夫して取り組んできてくださったことを、ぜひとも、共有しながらしっかりと同じ歩調で進めていくことが大切だと考えております。

続きまして、１５ページです。ここで、学力調査と質問紙調査とのクロス集計をお示しいたします。

これは、質問紙調査の質問項目において、それぞれの選択肢における学力調査の国語、算数、数学、理科の平均正答率について、関係をクロス集計したグラフです。

この１５ページのグラフでは、自分で計画を立てて勉強している子どもほど正答率が高くなっております。また、その下のグラフでございますけれども、家で学校の宿題をしている子どもと全くしていない子どもでは、正答率の差が小・中学校とも３０％以上見られました。

続きまして、学力調査と質問調査のクロス集計でございます。１６ページです。

家で学校の授業の予習・復習をしているかにかかわっては、している子どもと全くしていない子どもでは、小・中ともに１０％以上の正答率の差が見られました。

さらに、今年度の質問紙調査では、主体的な学びにつながる項目として、教科書を使いながら学習をしているかにかかわる質問がございました。この質問の意図は、家庭学習で反復の自主学習が多い現状を踏まえて、新指導要領の考えに基づいた自主学習がどれだけ進んでいるかを測るための項目だったと捉えています。

このグラフは、このことと正答率の関係を見るグラフで、関係性が見てとれるところです。宿題、予習、復習といった学校の授業とつながる家庭学習を進めていく。これが、子どもたちの学びをより主体的なものへと高めていくことにつながるのではないかと考えております。

以上、端折った説明でございましたけれども、学力学習状況調査の結果から見える彦根市の子どもたちの状況についての説明を終わらせていただきます。

○企画振興部長　ありがとうございました。

それでは、今ほどの説明を踏まえまして、皆様で意見交換をお願いしたいと思います。市長、よろしくお願いいたします。

○市長　ありがとうございました。

皆様とこの結果を受けてのご感想も含めて、議論を進めていきたいと思っております。

私自身としては、この過去のデータから、今年は厳しくなるだろうということはあらかじめ想定をしておりましたが、先生方をはじめ、関係の皆さんがご尽力いただいて、改善傾向は見てとれるというふうに思っております。

今、お話がありましたように、課題もきちんと総括をしていただいておりますので、今後、どのように行政、市長部局としても支援をさせていただく方策というか、材料がお示しいただけたらとは思っておりますが、具体の施策については、またこれからだとは思いますけれども。

ただ、改善傾向を示しているということは、大きな前進であるというふうに思っております。ぜひ、皆様から、今日の教育委員会会議での議論もあろうかと思いますので、それもご批評いただくとともに、今後、総合教育会議、彦根市の方向性としてどういった目標をもっていくのかというところも議論ができればなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

どうぞ。ご発言をいただけましたら。

○小松職務代理者　今回、この学力調査の報告を受けまして、学力向上という指標の中には、学学テストの結果というのは、全てを表しているかどうかはわからない。または、いろいろな方や、テストに対する批判ではないですけど、いろいろ注文づけされる方もおられますけれども、私は、やはり、学力向上とこのテストの結果は、重く考えるべきだと思っています。

そういう意味で、学力を上げることに対して、今、善住教育長が考えられてきて、非常に、私も改善傾向にはなっているというふうに思います。

この結果に対して、少し考え方をまとめていきたいと思います。

今回、分析の中で、回答というか、何問できたかというと、その占有率を階層的に分析していますよね。これは、ちょっと今まで私は知らなかったというか、初めての分析の結果なのですけれども。

これ、市教育委員会というのは、これ多分文科省から出ているような結果かなと思うのですけど、これを見ますと、やはり下位層、中間層、上位層という、そういうことも少し説明があったのですけれども、この分析の結果をもとに、彦根としてはどこに力を入れるのだと。平均点を上げる方法というのは、①下位を上げる、②中間層というのは一番人が多いので、中間層を上げる。③上位層に絞って上げるという３つの考え方があるのですけれども。

いろいろな学校の事情にもよって変わるとは思うのですけれども、やはり、この分析をしたというのは、何かそういう思いがあってされているのかなということで。彦根市の取り組むべきところというのは、漠然とするのではなしに、何か重点的に弱いところを上げると。そのことによって平均点を上げると。そんなような対策というのが、私は必要なのではないかと思っています。

また、単に点数を上げるだけかと言われたら困るんですけれども、先生方にもそういうことをしてもらって、そこをするという。今回の分析は、そういう意味を含まれているのかなと、私は感じました。

ぜひ、そういうこともやるというのは、僕は必要なことではないかなと。下位、中間、上位、どこに重点をおいて。そこまでいくと、少し学校ごとに分かれると思うのですけれども。全体ではわからないのですけれども。そこは、ちょっと分析と、学校教育をどう進めていくかというのは、考えていただきたいなと。この分析の結果からは、そう思いまし

た。

○本田委員　今の小松職務代理者のお話に関連してなのですけれども。やはり、これは、市のほうで分析してくれているのですけれども。それぞれの学校でも、多分、分析されて、一人一人に対しての細やかなつまずきとか、理解の程度とかも分析されていると思うのです。だから、これは全体は全体として、下位層も上位層も中間層も、本当に一人一人に力をつけるような授業改善に、現場で役立ててもらえるとありがたいなということを思います。

それから、１３ページの総括のところで、自主学習を習慣化することの大切さとか、互いの考えを伝え合い、ともに学び合う時間を充実させることの大事さとか、それから、表現力の向上とか、そういうことを総括で表してくださっておりますが、本当に、この学力・学習状況調査自体が、やはり、これからの子どもたちにつけたい全てではないでしょうけれども、つけたい力をもとに問題が作成されていると思うのです。だから、それを思ったときに、やはり、書く力とか、表現力と思うと、本当に全ての教科のベースは国語だなと、改めて感じます。無回答が多いというのは、やはり、最後まで粘り強く読み取る力とか、そういうところもなかなか出し切れなかった結果だと思いますので。理科にしても、英語にしても、ほかのどんな場面でも国語力がすごく大事だなと思います。

だから、これまでも十分力を注いでくれていると思うのですけれども、やはり、読書とか、どの教科においても、自分の考えをしゃべったりする時間とか、そういう授業改善に力を注いでもらえるとありがたいなと思っています。

それから、もう一つなのですけれども、このクロス集計を見ても、家庭学習とのかかわりがすごく分析されていると思うのです。やはり、家庭学習をどれだけするかで、力のつきようも違うと思いますので。よく教育長もおっしゃっているのですけれども、もっともっと、家庭学習のほうに力を入れるというか、淘汰していくというか、そういうことが課題になっているということが見えてきたのではないかと思います。

○市長　家庭学習を強化するというのは、どうすればいいのでしょうか。

○教育長　単純に、宿題を沢山すれば。福井県の教育長は、「福井県の学力が高いのは、宿題が日本一多いからだ。」とはっきりおっしゃっていますから。

宿題を出すというのはちょっと言葉としてきついですけれども。最初に子どもたちが自分で勉強をする形をつくっていく、学習習慣の入口。自分が一人で勉強する学習習慣づくりの入口が、宿題であると。それをきちんとやることで、子どもたちに自分で勉強するく

せを、先生がそばにいなくても、周りで友達が誰も勉強している状況でなくても、勉強するというくせをつけていくこと。最後、子どもらは、誰に言われなくても自分で勉強するくせをつけて、学校を終えていくわけですから。自分で勉強するくせがつかない子は、結局、学校にいる間しか勉強できないということでは困るわけですので。

その入口として、やはり、宿題は大事かなと思うところはあります。それからどう発展していくかは、いろいろあるのですが。

○市長　具体的に、彦根とどれぐらい違うものでしょう。宿題の量というのは。

○教育長　ものの本によると、全国から福井県の学校へ、参考にしようとしていろいろな教員が沢山派遣されています。その人たちがまとめた「福井県のここが違う」という本があります。それには、３倍違うと書いています。

○市長　３倍。我々のところにも、余りランドセルが重過ぎて気の毒だという投書もありますが、それは、やはり、持って帰らないと宿題はできませんよね。

○教育長　量が多い、どうのこうのではなくて。やはり、それだけ自分で勉強するくせがついている、つけようとしているというか。そういうことでもあると考えます。

量的に沢山出せば、それでいいというものでもないと思うので。沢山出したら子どもらが全部やってくるかといったら、そうでもないでしょうし。それだけの量をこなせるだけの地力というか、習慣づけというか、環境づくりというか、そういうものがあってのことだと思いますし。

３倍というのは、それは時間的に３倍にしたらいいかという問題でもないと思います。

○小松職務代理者　宿題というのは、やはり、出した以上は、やってきたことに対して先生がフォローをしてあげないといけないと思います。それが、結構な仕事量といいますかね。まあ、だから彦根は少ないかとは思いませんけれども。やはり、そことの兼ね合いみたいなものがあるのかな。先生もそんな暇もないですよね。それだったら宿題を出したらよいではないかいうことになる。

○教育長　福井県のある学校では、宿題を見る先生というのが、担任とは限らない。大変だから。

○小松職務代理者　やっぱり大変なんですね。

○教育長　だから、登校したら、みんなの宿題を集める係がいて、それを集めて先生のところへもっていくと、それをチェックして赤ペンを入れてくださる担当の先生がおられます。もちろん、担任の先生はいるのですけれども、小学校でしたら、担任以外にもおられ

ます。そういう形でフォローしているというか、応援部隊がちゃんと、小学校だったら担任の先生以外にもおられるということが書いてありました。

○市長　その支援していただく教員の先生かわかりませんが、１年生から６年生まで見られるのですか。例えば、低学年を重点的にとか。

○教育長　今、手元に資料がないのでわからないですけど、それは、やはり、分担しているでしょうね。それが全てかというと、そうでもない可能性が。それだけでやっておられるのではないかもしれない。いろいろな宿題を大量に出す、それを円滑にやっていくシステムというのを、福井県の中ではある程度つくっているのだと思いますけども。

宿題というのがひとつの例で、別に、大量に宿題を出すということが家庭学習の推進に、それだけで全部終わるわけではないということですけど。

○市長　それは、県の教育委員会の方針という部分が大きいのですか。そういう学力向上に対する、もっと宿題を出せというお話しだったり。

○教育長　ちょっとそこまでは、わかりませんけど、全国から福井県が全国１位だということで福井県のいろいろな学校へ研修派遣された方の共通の声として、そういう声が出てきているというだけで、それを支えるようないろいろなシステムは、またあるのでしょうし、宿題の出し方とか、クラスごとにばらばらに出してもだめなわけですし。教科ごとの会議をきちんとやっているとか。先生方の打ち合わせをする時間が、何らかの形で保証されているようなそういう部分もあるというような書き方がされていました。足並みがそろっていないとだめなのです。

○市長　県教委の方針というか、前の働き方改革の議論の中でありましたけれども、提出物が多過ぎるいう話とか。それは、減らすのはいいのですけれども、減らして制御をして働き方改革をしていこう。だけど、何のためにというのがね。先生方の働き方改革というのはいいのですけれども。それをして何をしたいのかというところが、やはり、議論が不足しているのかもしれないと思っているのですがね。特に、首長会議なんかではそんな話は出ていませんので。働き方改革が目的みたいになってしまっているので。そうではないだろうとは思うのですけれども。

そういうことをいろいろと議論をして、県が取り組んでいただかなければならない部分があるならば、それは、きちんと申し入れもしていかないといけないと思います。

○本田委員　働き方改革といっても、先生が子どもに向き合う時間とか、そういうのは私は省けないと思います。信頼関係とかいろいろなことから。

もっと本当に子どもに直接かかわらないような事務的な部分とか、あと、共同的に定期的な動きをしてくれる、そういう人を沢山補充されているとか、そういうことを言っているのかなと私は思うのですけど。

だから、去年の福井県の先生方の発表とかもここでありましたよね。そのときの発表を見たら、やはり、大量の宿題の点検とか、間違い直しまでも丁寧に見届ける。そうすると、してきたことの見返りというか、承認というか。そういうことを子どもたちが感じとって、それが力となって、またずっと定着していくようになるというか。何かそういう、先ほど徹底的なという話もありましたけれども。そこまでやっているということが報告されたと思うのです。

だから、きっと彦根でも宿題とかを出していると思うのですけれども、もっと、もう少し詰めがどうなのかなって、どこでそんな違いが出てくるのかなって、ちょっとそれは不思議なところでもあるのです。

親御さんも、この頃は働いているからなかなか見てあげられないだろうけれども、せめて、自分の子どもにだったら、小学校の低学年のときはちゃんとしたかどうか見てあげるとか、見たら印をつけてあげるとか、そういうこともしていると思うのですよ。

ただ、それが、ずっと学年が上がっても親が見なければいけないかというと、そうではなくて、自分の力でできるような習慣がという話がありましたけれども、習慣というのは、生活習慣と一緒で、学習習慣もある程度のところを超えたら、それをせずにはいられないというか。そういうところまで徹底してやらないと、将来のことまでを思ったら、何か途中で諦めるのではなく、徹底して家庭学習の仕方から何からきちんと、今も十分やっているとは思うのですけれども、そういうところも、もっともっと吟味していかなければならないのかなと思います。

忙しくても、皆さんの保護者の声かけとか、そういうのは期待できると思うのですよ。どの子の親も、自分の子ができるようになったらうれしいですし。家庭学習、宿題の量は別として、やはり、きちんとやるべきことをやるということは、将来の仕事とかにもかかわってくることですので。学校で、そういうことが必要だと思います。

○市長　どうですか。

○永濱委員　小松職務代理者とほぼ意見は一緒なのですけれども、基本、ベースはどこを目指すかというところですけれども。

やはり、最低平均までは、到達、常に、コンスタントにできる状況ではないかなと思っ

ているのです。彦根の先生方、僕らが知る限りでは、怠けているわけでは全然ありませんし、むしろ、頑張り過ぎている先生もおられるぐらいです。

福井とか、結果を残している県と比べてどこが違うかというと、先生の能力にそう大差はないのではないかなと。その仕方に関しては、多少の取っかかりというか、そういうところで差はできてしまうのかもしれませんけれども。

僕は、教職員にあまりこれ以上、求めていくのは酷なところでもあるんじゃないかなと思います。

そしたら、どこで改善するのかというと、かの委員会でも言ってましたけれども、やはり家族、家庭学習ですね。宿題の時間とか量というだけ、量と時間というのは、自分でやる、自分で考える時間というふうに捉えると、やはり、机にいようが、ふつうのテーブルにいようが、人に何か教えてもらう、受け身の勉強ではなく、ここがわからない。ここはわかったとか。答えが出たとか。そういうのを自分で、自己分析していくという時間だと思うので、それで、わからないところを採点でチェックしてくれるのが先生であり、その採点が甘ければ、そのわからないところをどんどんどんどん引きずって、数年後に大きく差が出てきてしまうということだと思うので。

今、彦根の先生がやっていることは、基本的には、僕は、このままやっていただきたいと思っております。ただ、端的な結果を求めるとすれば、具体的な授業形態、現に、小学校でいる先生、生徒さんたちに、どう教え方を変えるのかということになるのでしょうが。ちょっとその具体的な案は、今、現時点では思いつかないのですけれども。

基本的には、これは中長期的な視点ですが、やはり、低学年のときに読む力と、僕は、それプラス人の言葉や話を聞く力。ちょっと最近のお子さん方は、全員が全員ではないですが、自分の言いたいことは言うのだけれども、自己主張はするのだけれども、人の話を聞くというところに、落ちついて聞くというところに不十分さが見られるなと。授業参観などに行きましても。

これは、小学校に入ってから教えることではなくて、幼児教育という観点から、幼稚園、保育園、もしくは家庭ですね。一番重要なのは、本当に家庭なので。人の話を聞くということをまず教えてもらう。そこから始まるのではないかなと思います。

でないと、小学校に入って授業が始まって、人の話も、先生の話も聞かない。自分勝手に話したり、ご病気の方は別として、そういうふうに自分の思うように行動してしまうようであれば、小１の時点でそのような状況であれば、やはり、先生方も教えているつもり

でもその子にはもちろん伝わっていないし、また、ほかの子も、その子が気になって授業に集中できないという、その対象外の子に影響を受けるというところで。

小学校入学前からもう始まっているというのが、ここは小学校以前の方々にご協力をいただかないといけないというか、理解を求めていかないといけないというか。というところだと思います。

ちょっと、今現時点でクラス運営というか、授業が成立しないというクラスも、学校も、学年といいますか、一部あるように聞きますし。そういう状況では、もう授業自体が成立していなければ、もちろん、先生方も知識を与えることもできないですから。やはり、クラス運営というのを基本に、授業ができる環境をまずつくっていくというのを、今後入ってくる方はもちろん、今現におられる方も改善できればいいのですが。僕は、そこが一番というか、改善されるべき点のひとつかなと思います。

また、実際、授業自体が崩壊とまではいかないにしても、効果的な時間が授業に使われないクラスであれば、やはり補助の先生なりがさらに必要でしょうし。これは、どこまで、どの時期まで、何年後まで必要かどうかはわかりませんが。

今現在、市長にお願いすることは、県費の教職員、正規の教職員さんが、例えば、何らかの出産なり、いろいろな家庭のご事情なりで休まれたときに臨時講師が来られますが、大人であれば、代わりの先生だということで素直に受け入れて、授業もそのまま進めていけるのでしょうが、やはり、子どもというのはいろいろな考えというか、思いがあるので。先生が代わっただけでも、クラスの雰囲気というのが変わったりすることもあろうかと思うのです。全て、絶対とは言いませんが。

そういうときに、やはり、県費の臨時職員プラスアルファーをあてがってあげて、臨時講師の方のサポートも、やはりしてあげないと、それが原因で授業自体が成立しないということにならないようにということで、今、できる、もしくは、市長にお願いしたいことは、県がやってくれないことを、もう少し、ちょっとマンパワーを増やしていただきたいと。何十％削減という今厳しい財政の折ですが、ただ、でも、将来のためですので。今、ここでそこも削ってしまわれると、これまで以上にマイナスなベクトルがかかってくると、立て直しができないという状態になったらいけないと思うので。

やはり、教育というのが第一だと僕は思っていますので。いろいろなところにお金が必要だと思うのですけれども、ぜひ、お願いしたいと思います。

○市長　はい。どういうふうに伝わっているかは、定かではないのですが、一応、今の予

算編成方針としては、貯金のようなもので財政調整基金というものがあり、これは、予算額は年々に変動しますので、事業によって沢山必要だったり、必要でなかったり、それを調整するためのものですが、これを毎年大きく取り崩していくということは、もちろん、貯金が減るということです。貯金が増えないという前提に立つと、貯金をあてにして予算を組むというのは、よろしくないということで、この貯金をあてにしない予算編成をしましょうということでございます。

厳しいということはそうなのですが、それは、今まで貯金を大きく取り崩すということを前提としていた財政運営を見直そうということでございます。だから、どんどん削っていくとか、そういうことでもないということは御理解をいただきたいと思います。

将来の投資であるし、教育が充実しているということは、大きな意味でシティプロモーションにもなることですので。躊躇するということは、ないと思っています。

ただ、どういう形で予算を入れていったら効果があるのか。どういう展開が回ってくるのかということを、しっかり説明していかないといけません。ただ、教育というのはそんなにすぐに結果が出るものではないのは、皆さんご存じだと思います。

ただ、こうやって改善傾向が見えているということですので、やってきたことに間違いはないと。さらに、そこをどの程度まで引き上げて、平均値を常に上回る、まずそこのレベルを目指していこうということならば、どの程度の、どういう工夫をしてやっていくことが必要なのかということを議論していかねばなりません。

こちらサイドで政策的に教育現場に求めているようなものが幾つもあると思うのですね。行事であったり、学校運営であったり。必要だから、あるいは、地域の学校として特色をもつことが望ましいことではあるけれども。それが、仮に負担になっていたらだめですね。本末転倒だと思いますし、その辺のところも整理ができるものならば、していかなければならないだろうと思っております。

○小松職務代理者　この学力向上とお金という問題で、一方お金を使わない学力向上策というのは考えておかないと。私、２年前に敦賀の小学校に行かせていただいたのです。そのときに見た光景は、算数の授業で立体の展開図とかを教える授業だったのですけれども、非常にベテランの先生が担当されていましてね。そこにＩＣＴみたいなものがありまして、ＩＣＴで実際の展開図とか、ＩＣＴの使い方と黒板での使い方とか、そういう授業をされていたのですよ。

その授業の様子を、ずっとビデオに撮られている人がいたのです。僕は、その人に、

「それは何に使われるのですか。」と聞いたら、「うまい先生なので、そのやり方をいろいろな人に見てもらうために撮っているんです。」という話がありました。

多分、彦根市でもそういうことはやっていると思うのです。今､永濱委員が言われたように、いろいろな臨時の人とか、新人の先生方。先生のやり方ということが学力向上というのは結構つながっているところは確かだと思いますので。そのために、いろいろな人を入れてもらうのがあるのですけれども。

そういうところに、臨時先生とか、それをやってもらう時間はとってもらわないといけないですけど。そういうことも、徹底してご理解いただいて勉強してもらうというか、そういうことが必要じゃないかなと思ったのです。

今、非常に財政が厳しいので、できたらそれをお願いしたいけれども。それができないから学力向上ができないと、それはまた別個の問題で。環境の中でいかに学力を上げていくかということは、かたや現場では考えていかないといけない。

その中のひとつとして、私は、そういうような場面にあったんじゃないかと。そういう地道な先生の質を上げるという。質というと失礼だけれどもね。やはり、教え方というのは、若い人とベテランとは大分違うので。敦賀なんかは、それを少しずつやっているのだなということはちょっと感じたのですけれども。そういうことも必要かなと、思いますけれども。

○教育長　家庭学習の話をするときに、家庭環境の問題ということになってしまわないように気をつけないといけないと思っているのですよ。

家庭環境、教育論の雑誌を見ると、学力と明らかに相関があるというのがもうあちこち指摘されているのですけれども。家庭の所得と保護者の学歴、これを数値化してＳＥＳとかいう指標にして、それとの相関は指摘されるのですけれども。

けれども、それでは、所得が上がれば子どもの学力は自動的に上がるかといったら、そうは単純な関係ではなくて。子どもの学力が高い子どもには、一定の家庭環境の傾向は見られるのですね。その程度のことなのですけれども。

ただ、その中に、例えば、生活習慣がしっかりしている。朝、必ず朝ご飯を食べてくる子とか。それから、親が小さいときに沢山ほめて育てた子とか。我慢することを教えた子とか。いろいろな本の読み聞かせをして、外国の話なども沢山して知的好奇心を刺激してきた子とか。あるいは、子どもといろいろな行事に一緒に参加して、会話を沢山してこられたご家庭とか。その中に、家庭学習が習慣づけられているというのが一つある。そうい

うものなのですけれども。

家庭学習の話だけ、宿題の話だけすると、何か家庭環境の話、子育ての話になってしまって。家庭のことは親御さんの話だと。だから、そっちの問題にしてはいけないと思っているのですよ。今の学力の問題というのを、家庭環境と関係はあるのでしょうけれども。我々が今、教育委員会と一緒に学校の立場で申し上げますと、やはり、そこでできることには限りがあるわけで。家庭環境全般というのは、教育委員会ではできないし、もちろん、市としても、全てがそれで解決する問題ではないでしょうし。

でも、その中で、学校から働きかけができる部分というのをやはり、見ていかないといけない中で、例えば、ひとつが宿題かなということを申し上げているわけで。子どもの学力を家庭環境のせいにして、それは親御さんのせいになるという考え方でやるべき問題ではないと思っていますし、実際、全国でも学力調査の結果の高い、秋田とか福井とか、そこには、いわゆる、家庭の環境として問題がないかといったら、そんなことはないわけで、みんな、敦賀に行ったときも、「なかなか難しいご家庭が多いんです。」って言われているような学校へ行っても、やはり、彦根とは数字が違うというぐらいのところであったわけで。

その中で、学校としてどういう手を打つかということを考える中で、そのひとつは、家庭学習のことかなと。家で子どもがちゃんと宿題をするところから始めて、自分で勉強してくれるように育てていくような学校の働きかけをもっと工夫していこうと。今、そういうことを教育委員会のほうで話をしているところでございまして。

できれば、それは、親御さんのほうにもアピールしないといけないし、ご協力もいただきたいということなのですね。

○本田委員　やはり、学校は、教員は、子どもたちに、それはどの幼稚園も、保育園も、小学校も、中学校も、高校もだと思いますけれども、子どもたちに点数だけの学力ではなくて、もっと広い意味での学力で思うのですが、そういう力をつけることが、専門職というか、仕事じゃないですか。だから、それはもう絶対、大変とかという問題ではなくて、それをするためにその仕事に就いたわけだから、もっとそういう使命感というものをもっていると思うし。

だから、先ほど職員の勉強の話が出ましたけれども、きっと、彦根でもそれぞれの学校で授業研究会とかをやって、若い先生たちが勉強する場面とかそういうことも多分頑張っていると思うのですけれども。

やはり、若いから、経験がないから力がないのは当たり前のことで。だからこそ、もっと限られた人数の中でチームとして。今、特に若い先生がどんどん増えている時期なので、本当に、それこそ、忙しいから大変だからではなくて、研究授業とか、授業研究会とか、いかにしたら子どもたちに力をつけてあげられるかとか。そういうことを、お互いに高め合うというか、それが大事かなと思います。

○西川委員　いろいろお話、意見などを聞かせていただいてなるほどなという勉強ばかりなのですが、先ほど、言われましたが、やはり、聞くということは大事だと思うのです。聞く態度とか、それを聞いて話していくというのが。

聞くということは、赤ちゃんで生まれたときに、何もわからないところから１番にお母さんが話しかける。目を見て話しかける。それから、おうちの方とか、周りの大人が「かわいいね。かわいいね。」って言って子どもに話しかけることによって、聞くという部分が発達していくのですよね。

そういうときに、最近のおうちの方って、結構携帯とかスマホとか、それが中心の生活になっていって、赤ちゃんが生まれて一生懸命顔を見ていても、その目に向かってしゃべらなくて、こっちばかり、こっちばかりというような傾向にあるのではないかと思うのです。

やはり、大事なのは、乳幼児期にいろいろ話しかけて、聞かせて、話すという力を、聞くという力を身につける。そういうことも大事なのではないかなと思うのです。

家庭学習なども大切だと思いますが、塾へ通っている子どもさんもおられますよね。学校が終わって塾へ行って、それから家で宿題をしてというと、いつ子どもたちは遊ぶのかなと。学校の授業の間に休み時間がありますし、そういう関わりで遊ぶこともできます。体育の授業で体を使うこともできますし。

でも、昔だったら、暗くなるまで外で遊んでいる子どもたちの声というのが聞こえたのですけれど。このごろ、子どもたちの人数も少なくなってきたので、そういうこともなかなか聞けないような状態だと思うのですけれども。

やはり、人の話を耳から聞く、聞く態度。それによって、言葉を話すということは、大事な身につけるべきことだと思いました。

国語のことも出ていましたけれども、本を読む、楽しむということが自分の力になっていくと思いますし。そういう環境が大切だと思うので、やはり、学校の図書を充実させるとか、図書館もありますけれども。なかなか利用できないというところもあると思います

ので。遠いということもあるし、一人ではなかなか行けないということもありますよね。誰かに連れて行ってもらわないと。特に、小学校の低学年や幼稚園、保育園の子どもたちは一人で行くということはできませんので。

そういうところを、もう少し充実させてもらえると、国語の力も伸びていくのではないかなと思います。興味、楽しみを生みますよ。

○市長　学校の図書室の図書支援委員は、６名おられます。支援員にぐるぐる回っていただいているのと。各公民館も図書室があるのですよね。使っている子は使っているように見受けますけど。できるものをどんどん活用していただきたい。図書館の問題は大きな問題だと思っています。たちばな号も頑張ってくれていますけれども、各学校への図書の貸し出し、学校へ図書をまとめ貸し５０冊のシステムもありますので、そういうものなどをうまく活用していただいて、どんどん学校の図書室を活性化していってもらいたいとは思っています。

○教育長　資料の１５ページのグラフで、家庭学習との関わりで宿題のところが出ていますよね。これ、小学校で６年生ですよね。１年生ではなくて６年生なのですよね。だから、小学校６年生で家で全く宿題をしない子は、正答率が２０％を超えたくらいしかない。だから、４問に１問ぐらいしか解けないということですよね。でも、毎日家で宿題をしている子は３分の２以上、３分の２ぐらいは正答が書けるのですよね。

だから、こういうのを考えると、きちんと小学校で家で宿題をしていますかという資料の１５ページの表で、この赤い線が１００になれば、赤い横棒が１００までいったら、正答率は６０％を超えるということですよね。だから、６年生が全員家で宿題をしたら、彦根市の全国平均値は６０点以上になるという。単純に言ったらそういうことなのでしょうかね。

私も、宿題ばかり言っているわけではないのですけれども。宿題だけではだめだと思うし。宿題というのは勉強のくせをつける入口だと思うので。

これが６０％が１年とか２年だったらこの棒グラフはあり得るかなと思うのですよ。例えば、家でやっていない子がいる。小学校の低学年は、３人に１人が放課後児童クラブに行っていますので、６時ぐらいまでは放課後児童クラブにいるので、家で宿題をしている暇が多分ないので。

○市長　放課後児童クラブで宿題をさせるじゃないですか。

○教育長　放課後児童クラブは、教育委員会所管にしていただいているので、必ず宿題か

ら始めてくださいと。６年生はほとんどいないので、このグラフには出てこない。低学年は３人に１人なので。３，０００人ぐらい。１学年１，０００人ぐらいなので。沢山の子どもを預かっているのですけれども。いろいろな家庭があるので。放課後児童クラブにきている子どもの家庭は、親御さんが夕方まで子どもさんの面倒を見られない。だから、放課後児童クラブで、うちとしてお預かりしているわけで、そういう子が、例えば、６年生になったらひょっとしたらですよ。

○市長　教育委員会の所管になったのは、３年前でしたかね。そうすると、その当時、３年生ぐらいの子が今年６年生になってこの数字に出てくると。

○教育長　その放課後児童クラブで、ただ行って夕方まで何もしないという状態で過ごすのではなくて、指導員さんに、まず、宿題をきちんとさせてくださいと今はお願いしているのです。１年生だったら、公民館の机みたいな端のほうで、プリントを出して漢字を書いたりしています。それから、おやつをもらってグラウンドへ飛び出して遊びに行ったりしているのですけれども、やはり、そういう現代的な家庭のことを考えて、これからどんどんどんどん、そういう放課後児童クラブに来る子も、すごく増えてきているので、その辺に、しっかりと手を入れていくというのも、この赤い棒を１００にもっていく、ひとつの道になるかなと思います。

○市長　放課後児童クラブを委託する場合は、指導に書いてましたよね。まず、宿題をさせるようにとか。

○教育長　こういうふうにお願いをしているので。皆さん、見に行くとしてくれている。

○本田委員　でも、先生、門戸は生涯学習課で、６年生までって開いていますでしょ。いいですよっていって、希望されるならって。

○教育長　今は、６年生まで希望すれば入れます。

○事務局　はい。ただし、教育委員会に移管をされたときは、３年生までです。まだ拡充はしておらず、４、５、６年生は対象ではなかったので、拡充をして、およそ３年目です。

○本田委員　ただ、６年生になると、もうちょっと大人に近いような心理状態とかいろいろな事情もあるので。そこに絶対行こうと思わない子も。一人でお留守番ができるようになるし。

○教育長　放課後児童クラブが全てじゃないのですけれども、そういう子どもの面倒を見られないお宅について、家庭環境にこちらが何か手を差し伸べられる部分が、例えば、放課後児童クラブみたいなところを充実するという、そういう形になるという。

○市長　データで、放課後児童クラブに行っていた子かどうかというのは、わからないですか。

○事務局　そこは、質問項目にはございませんので。

○市長　それは加えられるのですか。

○事務局　いや。全国調査ですので。

○市長　彦根市の調査はやりますよね。１２月に学力調査。

○教育長　これは学力調査ではなくて、学習状況調査です。２つあります。学力、学習状況調査ですね。これは、学習状況調査のデータで、彦根は、それはやりません。

○市長　漠然と放課後児童クラブが教育委員会として、あるいは、行政として、テコ入れ的にやったという、何か裏づけがね。それが調査できれば、おもしろいかなと。

○教育長　なかなかそれは、ちょっと。

○小松職務代理者　それはできないというのは、何かあるのですか。個人情報とか、そのようなことですか。

○教育長　それもあるし、学力との関係を見ないといけないわけですから。これは、学力と宿題の状況とリンクさせたデータなので。放課後児童クラブと学力の関係を見るというのは、なかなか難しいのではないですかね。学校以外の部分で、やはり、打っていく手が必要な部分があるということだと思うのですけれども。

○永濱委員　すみません。一つ。討議している中で申しわけないですけれども、今の資料の赤、黄色、緑、青の。これは、どちらかといえばしている、あまりしていない、全くしていないと。同じＮのような形で、数のような形で、母数のような形でパーセンテージが出ていますけれども。

　このそれぞれは、全員を１００％としたら、大体何％ずつなのですか。全てしている子が、例えば３０％、どちらかと言えばしているというのが４０％、余りしていないというのが３０％としたら、後が、全くしていないになりますよね。

　どこに重点を置くか、どの部分の子にターゲットを置くか。もちろん、全くしていない子を減らすことは重要なのですが。思ったより、あまりしていないのほうがどんと多かったりしたらあれなので。この４つの試算があるわけですね。４つの答えの項目があるわけですね。それぞれのパーセンテージを、また今後教えてください。

○小松職務代理者　今、教育長が言われた学校以外でのことが大事という中で、理科がありますよね。理科も、中学校ではほぼ全国レベルなのですけれども。やはり、小学校より

は平均点が下がっている。

理科というのは、彦根っ子の課題でも書かれているのですけれども、自分の予想ごとに観測や実験の計画を立て、いろいろ考えてするという、そういうことが課題だと書かれているのですけれども。やはり、これからのいろいろな好奇心をもつとか、不思議だなという力をもつというのは、理科という科目は、私は大事じゃないかなと思っているのです。

昔はカエルの解剖とか、そういう実験とか、いろいろなことに時間を結構とっていたような気がします。最近の先生の話が少し載っている記事なんかを見ますと、やはり、時間がなくて、実験はするけれども、１回失敗してもまたその場で終わって、正解はこうですというような。繰り返しの失敗の中でいろいろな知恵が浮かぶとかいうところがあるので。なかなか、そのあたりが少し、ある程度時間をとってやってほしいということ。

また、彦根市の場合は、彦根市サイエンスプロジェクトで、今、ロボットとか、いろいろな科学とか宇宙とか、これも生涯学習課ですかね、やってくれているので。応募の人も結構多いと聞いていますので、やはり、そういう授業とは別のところの活動といいますか、そういうところで少し、なかなか目に見えた成果というのはあれですけれども、そういうところが大事かなというのは、私も感じます。

○市長　サイエンスプロジェクトもそうなのですけれども、教育委員会の中から出てきた話ではなくて、こういうことはやったらいいとか、いろいろな世論の中から提案されたような事業で、各学校なり教育委員会で取り組んでいただいているようなことで、必ずしも、学力向上につながらなかったり、負担が大きかったり、効果が疑問視されるとか、まだちょっといろいろな意見が出てくるような事業で、やめられるものだったら、これはいいとおっしゃったのですけれども、ほかのいろいろなもので、整理できるものだったら、整理していっていただいたらいいと思うのですね。

以前、中学生ひろばでしたでしょうか。市議会ではいろいろな意見もありましたけれども。学校現場で、必ずしも、それが効果があるという意見ばかりではなかったというふうに聞いています。そういうのはきちんと説明をして、整理をするということも必要だと思います。そういったものがあれば、どうぞ俎上にあげていただければと思います。

○小松職務代理者　確かに、市長、ＩＣＴっていろいろ金を沢山使っているけど、どうなのだとよく質問されますよね。ＩＣＴって結構お金が必要ですよね。今、鳥居本中心に投資をいただいて、私はレベルが上がっていると思うのですけれども。

やはり、使う側の責任として、効果をどう説明できるかというのは、常に準備しておか

ないといけない思うのです。

だから、要するに、お金を投資することに対して、当然、効果というのがないと。そこが、なかなか民間で事業をやっていた場合は売上であったり、利益であったり、非常に説明はわかりやすくできるのですけれども、学校の教育現場というのは、なかなかないから、すぐこの学力テストの結果にいくのですけれどもね。

やはり、僕は、今市長が言われたように、何をやって、何をやめるかということになりますと、継続して欲しかったらそれなりの効果を市長に説明できる準備というのは、やはり必要だなと。それは、こちら側の問題かなと。それはちょっと感じます。

費用はどんどん厳しい中で、何でもかんでもというのはできないというのは、それは、市長、わかるので。それであれば、我々側がいかに効果を、定量的にできなかったら精いっぱい、定性的なものとか、いろいろなアンケートとか、そういうものでもいいのですけれどもね。そこの準備というのは、市長に示せるような材料というのは必要かなというふうには、ちょっと思っているのですけれども。

いいのですとか、効果があるのですとかだけではわかってもらえないと。これからのお金の使い方、そこは、やはり、我々側も示していけるようなものというのは、作っていかないといけないなと思っているのですけれども。

○市長　学校現場や教育委員会も、いろいろな民間の力を積極的に使っていただいたらいいと思ったりするのですけれどもね。

昔、宇宙へ行かれた毛利さんをお招きして、あれは、小学生か、中学生か、寄せましたでしょ。あれは、ロータリークラブかどこかでやったのですけれどもね。そういうのは、効果があるのでしょうか。子どもたちに。

先ほど、サイエンスでも、商工会議所が滋賀大と協力してコンピューターのデータサイエンスか何かやっておられました。

○小松職務代理者　ロボットの競技大会とか、そんなようなことはいろいろ過去に。日本で優勝したとか、そういう実績はあります。

○永濱委員　でんじろうさんでしたっけ。化学の実験。ああいう方のほうが効果的だとは思いますが。費用面でも。

○教育長　昨年度は、滋賀大のデータサイエンス部にお願いして、彦根市の小学生を集めてもらってプログラミング学習をしました。今年は、商工会議所でやっていただいて、ものすごく人気がある講座です。確かに、それが将来的にすごいＳＥを何人生み出したかと

か、数学が何点上がったか、そういう見方では小学生とかを相手にした場合は、それはやっぱりだめだと思います。

それより、やはり、ニーズがどれぐらいあったかのほうです。プログラミング学習はものすごく沢山来ているので、そういう意味でのニーズです。小学校の子はいろいろなもののきっかけとなるものを与えてあげるという部分で、最終的な大人になったときの成果を問うのは、やはり、ちょっと無理がある。

○小松職務代理者　あれは、子どものニーズというより親のニーズが強い。というのは、お金を払わないといけませんからね。わずか６日だって、２万幾ら払うのです。半分は、商工会議所が負担していますけれどもね。だから、４万円かかるわけですよ、６日間やるのに。それでも、参加者が多いのですよ。

だから、それはなぜかというと、それぞれの親御さんがそういう方向で知っておいてほしいというか、そういうところからきているとは思うのですね。

だから、なかなか我々は、そういう先のことまでわかりませんけれども、今、やはり、教育長が言われたように、そういうニーズがあれば、ちゃんと開いたらいいのかなという感じがしますけれども。

○市長　最近は、あまりタブレット授業という話を聞かなくなりました。

○小松職務代理者　何か新しいものが、どんどん進んでいますのでね。

○市長　今、小学生でスマートフォンをもっている率って、どれぐらいあるのですか。

○事務局　はっきりとしたデータはございませんが、小学校の高学年で７割から８割ぐらいです。

○市長　その程度持っていて、学校に改めてタブレットを入れる必要があるのかどうかと思う部分はあります。もう、民間のソフトがどんどんいろいろなものをやっていますから。

○教育長　基本的には、学校には携帯電話はもってきたらいけない。

○小松職務代理者　それは、電話のかわりにもっているの、あれ。家庭との連絡手段なのかね。ＬＩＮＥとかＳＮＳとかやっているのかね。

○市長　そう。だから、あれは、要するに、文章が短いので語彙力がそれで育たないという話も、前に協議しました。それは、そういうこともあるのかなと思ったりもしますけど。

○小松職務代理者　来年になりますと、また英語という科目が学学テストに入るのですよ。この間、全体の教育委員会の会議でもありましたけど、そういうことをそれぞれ各県の教育委員会は、もう既に準備していますが、滋賀県は、そういう面は遅れているのですよね。

先ほど、宿題の話で県の教育委員会はそういう方針が出ているのかと市長が言われましたけれども、私も、県の教育委員会を少し見ていますと、県の教育委員会というのは、そういうのは出さないですよね。やはり、市の教育委員会でやってくださいと。任せっきりだったりするのですよ。本当に学力向上についても、これは具体的にいろいろ、今回は分析はされているのかもしれませんけれども。僕らから言ったら、市へ丸投げだなという感じがしますよね。そういう感じがします。

だから、来年の英語が入ってきたときのテストの結果も、滋賀県は絶対下になるわけですよ。また四十何位だと。それは、もうわかっている。というのは、今年準備していないからだというわけですよ。ところが、そういうことをきちんと準備しているところは、県の指導でいろいろとやっていると。そういうことをはっきり言われた教育長がいらっしゃったのですけれどもね。

僕らも、やはり、県の方針に頼っていたらいけないと。それは思うのですよ。だから、やはり、市の中で。なかなか県に言ってもお金ももらえませんのでね。ただ、いろいろな指導はしてくれるみたいな、その辺は、うまく応援してもらったらいいとは思うのですけれども、県の教育委員会の指導だけではなく、やはり、この問題は市の教育委員会でしっかり方針を決めてやらないと。結果で、県が悪いのだと言っても、そんなことは通らないし、ますます、来年度か次の、学力テストそのものはなくならないと思うのですよ、私。

○市長　来年は英、数、国。

○教育長　英、数、国になって、ＡとＢを統一しますので。今、小学校国語Ａ、Ｂ、算数Ａ、Ｂでやっていますけれども、もうＡもＢもなくなって、国語、算数、そういう形になります。英語は、小学校ではまだないではないかと。中学校に英語が入るとは思いますけど。

○市長　中学校はね、もうやっているので。

○教育長　何年に１回だと思います、最初入るのは。しかも、これ、今度英語ということになると、読む、聞く、話す、書くですから、リスニングを入れていかないといけないのではないですか。そうすると、センター試験のリスニングテストみたいな感じ。準備をしないといけないのでしょう。なら、毎年大変ですよ。全国の中学校３年生にリスニングテストをするって。

○市長　どこでするのでしょうか。

○教育長　それは、学校しかないんじゃないですか。どうやってするのか。

○市長　学校でも、どうですかね。できるのでしょうか。ミシガンセンターなんかを上手に使ってくれたらいいと思うのですけれども。

○教育長　それで、小学校のイングリッシュコンテストは、ミシガンでやらせてもらっていますけど。

○小松職務代理者　聞きますと、ミシガンの学生が小学校へ行って、一緒にいろいろ英語でゲームをしたり。だから、イングリッシュコンテストでいったら、顔見知りの人とかもいましたけどね。だから、そういう交流はやってもらっているみたいですね。

○教育長　商工会議所から、これもお世話になっていますので。

○小松職務代理者　また、来年も２月の初めに、それは３年目なのですけれども、やります。ミシガンの学生さんと、やられていましたね。

○市長　ぜひ、使っていただいて。

○小松職務代理者　あれも、なかなか予算が厳しいので。審査員の先生なんかにも、ほとんどわずかな。だから、担当のところは気を遣っていましたけどね。少ない予算でやらないといけない。

○市長　例えば、地理的に、西中だとか、城北小学校だとか、もっと協定でも結んでやってくれたら、モデル校で。

○本田委員　７月３日に大津の英語教育について発表を聞きましたでしょう。その前に、彦根市の英語は、前倒しでやっていることを説明してくれましたでしょう。そしたら、海外の方への語学研修は別として、全部、彦根のほうが朝の帯時間とか、いろいろなところで充実させていますでしょう。それは、評価できると思うのですよ。

　今、おっしゃっているイングリッシュコンテスト。それは、全員いけるわけではないし。それは、ひとつの発表する、表現する場としてのきっかけというか。そういうところを用意してくださるのは、とてもいことなのですけれども。やはり、基本は、学校でいかにそういう力をつけてもらうのかというところだと思うので。

○小松職務代理者　今は、学校以外で、例えば、家庭とか、今言っているサイエンスとか、そういうところでやっていく機会も必要だなという話があったので、ちょっとそういう話が出ているとは思うのですよね。

○本田委員　英語のテストも入ってくるから。

○市長　鳥居本の子は発音がいいのでね。

○小松職務代理者　そうですか。

○市長　それは、いいと思いますよ。小さい頃からやっていますので、あの子らは。小学校からやっていましたでしょ、鳥居本の子ね。あそこの鳥居本学園の開講式のときに、英語で案内をしていましたけど、それは、きれいな発音でやっていましたよ。英語のテストがあったら、期待してます。

○小松職務代理者　慣れも必要ですからね。

○教育長　大津の市長さんは、教員をフィリピンに英語研修で送られましたけど。前回の総合教育会議では、そういう発表でした。彦根だったら、別にフィリピンに行かなくてもあそこにあるのだから。

○本田委員　ミシガンね。先生方の研修ね。

○小松職務代理者　そういうのはないのですか、ミシガンと先生。

○教育長　いや、あることはあるのですけれども。ひとつは、先生が夜、そこまでわざわざまた行かなければいけない。だから、フィリピンの研修はどんなのかは知りませんけれども。勤務の一環としてやるのだったら、その間、代わりの講師を用意するとか、そういう対応をしないと。

○市長　ミシガンができたときには、教員枠というのが研修であったと思うのですけどね。ご存じないですか。

○教育長　今、働き方改革の時代なので、夜、ミシガン大学へ行けというような研修は、設定しにくいですよね。そうすると、やはり、何人かの先生が一カ月勤務を離れてあそこで研修とか。そういう形になるのだったら、可能性はあるかもしれませんけれども。

○市長　まあ、どっぷりというよりも、毎日少しずつならしていかないと、語学はね。特に、リスニング、スピーキングは時間がかかりますので。

○教育長　市内は、やっていますよ。鳥居本で開発したものを小学校、あれは低学年からやっていますけれども。

○市長　進んでいるとは思いますよ。

○教育長　よそはそこまで、まだできていないところが沢山あると思います。

○市長　特に、いかがでございますか。

○企画振興部長　はい。ほか、よろしいですか。

○市長　目標というのはどうですか。また、御検討いただいて。各校あると思いますので。

○教育長　学力のですか。これはもう、毎年出させているので。それぞれの学校で子どもの状況が違うので、同じことをやりなさいとは言っておりませんので。なるべくその学校

に応じた、学校が安定した教育環境になることが大事だという学校は、それを第一にやってくるし。

そうではなくて、先ほど言った、宿題を考えようかという学校もあるし。授業をちょっと工夫してみようかという学校もあるし。その学校の子どもの状況に応じてやってもらっていますので。それは、もうずっと継続したいと思う。

今年、ちょっと変えようと思っているのは、前も言いましたけれども、今まで彦根市の基礎学力テストというのを４月にやっていましたけれども。年に１回、これも文科省の学力学習状況調査と同時なので、結局、学校は、学力の実態をつかんで、それを見直すというのは１年サイクル。スパンが１年。それでは、やはり、もやもやとぼけてしまうので。今年はそれを切り離して、彦根市の学力テストは、１２月に別にやります。そうすると、４月に国がやって、彦根市は１２月にやると。年２回、実態をつかんで見直す機会を与えていけます。新しく、今年度から始まりますので。福井県は、それが３回あるのです。国がやって、福井県がやって、敦賀市がやると。うちはそれがないので。彦根は分離して、２回目に別のところにもってきたということです。それで、また今年は学校にいろいろな対応をしてもらおうと思っておりますので。

○小松職務代理者　教育長にちょっとお聞きしたいのですけれども、やはり、教育長が来られて３年たったら、かなりこの学力調査に対して各幹部にいろいろ言われているでしょうけれども。

やはり、担当の先生方の考え方というのは、年々学力テストに対する取組というか、考え方というのは変わってはきているなと感じられていますか。

私、昔、ちょっと教育委員長をやらせてもらったときに、学力をいかに上げるかというのはいろいろ学校に個人的にも回らせてもらったのですけれども。なかなか学力テストに対して、批判的に言う方もいらっしゃったし。それがどういう意味があるのだという、そういうのがあって。かなり、ばらつきがいろいろあったので。そこら辺はどうかなと思って。

○教育長　ひとつは、最初はそういう方が多かったですし、ただ、３年間、私同じことをずっと言っているので。多分、最近では、一定、少なくとも市の教育委員会というか、教育長はそれを一生懸命言っているということは伝わってきているのではないかなと思います。特に、小学校あたりは、校長先生から個々の担任のところへそういう発信がされていくケースがかなりあると思っています。

ただ、同じことをずっと言っているとマンネリ化していくケースもあるので、言い方、やり方を変えていかないといけないと。１年目、８科目中４科目が全国平均を超えるところまで、ゼロから４つ超えたのですね。けれども、２年目は、８つのうちの２つしか超えなかった。３年目は、１つも超えなかった。

全国平均の差はずっと縮小しているのですけれども、でも、やはり超えたい、全部超えたいので、そこまでいこうとすると、同じことを繰り返し言っているだけではだめなので。先ほど言いましたように、４月にやっていたものを切り離して１２月にやって、もう一回そこで見直して、３学期、もう一回、頑張って翌年の４月の全国の学力学習状況調査で結果を見ようという。短いスパンで、ＰＤＣＡを２回回すという形に変えるとかいうことを、少しずつやっていく。ある程度浸透はしているかもしれないけれども、浸透していくことと同時に、マンネリ化していっているので。そこを両方やらないといけない。

もうひとつ。中学校ですね。中学校は、教科の問題ということになるので。国語は国語の先生だけ、数学は数学の先生だけという形になりがちなので、それをどう克服するかというのは、大きな課題かなと。

実際に、１４ページを見ていただいてもわかりますけれども。小学校は、明らかに改善傾向に、全体的に右の方へ上り調子の傾向が見えるけれども。中学校は、実際は、全国平均との差は縮小してはきているのですけれども、余り目に見える改善という形にはなってきていないので。これは、やはり出てこないといけないので。その手をどううつか。その要因のひとつは、小学校の学力の問題なので。小学校の基盤ができてくれば、中学校でも徐々に影響は出てくると考えてはいますけれども。やはり、中学校で目に見える改善が見られるようなやり方というのを、これからもっと探していかないといけないなと。

来年度は、それをなし遂げてきた大阪府の茨木へ、１回見に行こうかなと。福井とか石川とか、全国平均が高いところではなくて、そういうやり方で中学校を押し上げてきた茨木を、一回見に行こうかなと。これまで、福井・石川やら１００人以上彦根市から、６００人の教員のうち１００人ぐらいは先進地視察しましたので。今度は、ちょっと一回違うところにしようかなという。今、それで計画をしています。

○市長　９月に、再任の議案を出すに当たって、いろいろと私も耳に入ってきましたけれども。学力向上ばかり言うといって、逆の意見があったということはそれだけ浸透しているということですし、傾向として見えてきていると。ただ、これが糸口なのだということをもっと深く、現場の先生方、あるいは、関係者が理解をしていってずっと流れていくと、

さらにいいとは思うのですけれども。

ちょっと、説明の仕方も、我々も含めて議会でも期待を込めてもっといけると思っておられる人もあったと思うのですけれども。その辺を、もう少し丁寧に説明をしていく必要があったかなとは思いますけれども。方向性は、間違っていないと思っていますけれども。

○企画振興部長　その他、よろしいですか。

それでは、長時間にわたりまして、大変、多岐にわたりいろいろご議論いただきまして、どうもありがとうございます。その他でございますけれども。次回の総合教育会議は、１２月２６日、水曜日の午後を予定しておりますので。また、改めましてご案内はさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、平成３０年度２回目の彦根市総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。